

Title	国際シンポジウム「プルーストと受容の美学」報告
Author(s)	和田, 章男
Citation	Gallia. 2020, 59, p. 89-90
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/77096">https://hdl.handle.net/11094/77096</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 国際シンポジウム 「プルーストと受容の美学」報告

和田 章男

2019年9月28日～29日の2日間、大阪大学で「プルーストと受容の美学」（«Proust et l'esthétique de la réception»）と題する国際シンポジウムを、日本学術振興会の支援（科学研究費補助金・基盤C「プルーストにおける音楽受容と小説創造」代表：和田章男）のもと、日本プルースト研究会および関西プルースト研究会の共催により開催した。フランス人研究者2名、日本人研究者11名による口頭発表に基づき、活発な討論が行われた。28日には40名、29日には30数名の参加者があった。

『サント＝ブーヴに反論する』という評論が発展して形成された『失われた時を求めて』と題された大作には、数多くの実在の人名が含まれており、物語形体の「百科全書」の観を呈している。実在の作家・芸術家あるいはその作品への言及や暗示は、小説世界に深みと広がりを与えるとともに、本作が西洋の歴史あるいは人類の歴史にしっかりと根ざしていることを証している。プルーストはそれらの実在の作家たちや芸術家たちをどのように受容し、どのように作品に導入したのかという問いは、受容から創造へのダイナミックな転換の多様な様相を明らかにするものであろう。

プルーストにおける受容は、創造へと転換される能動的な活動であるがゆえに、本シンポジウムでは「受容の美学」という表現を用いた。それは文学・芸術の領域だけに留まらず、思想、政治、科学、教育など広く多様な分野が対象となる。フランスからプルースト草稿の専門家ナタリー・モーリヤック・ダイヤー氏、音楽受容を専門とするセル・ルブラン氏が参加した。草稿と書簡の専門家であるフランソワーズ・ルリッシュ氏は都合により来日が叶わなかったが、シンポジウムにおいて同氏の業績が頻繁に引用されたことを申し添えたい。

### 発表者と題目（発表順）

津森圭一（新潟大学）「プルーストとナビ派の画家たち」«Proust et les Nabis»

松原陽子（明治大学）「イポリットの死と絵画『カルクチュエイ港』」«La fin d'Hippolyte et le "Port de Carquethuit"»

村上祐二（京都大学）「プルースト初期作品におけるユダヤ人」«Proust entre Bernard Lazare et Drumont»

加藤靖恵（名古屋大学）「ファロア版『サント＝ブーヴに反して』におけるラスキン批評」«Profil de Proust "contre Ruskin" ébauché dans le montage par

Fallois»

湯沢英彦（明治学院大学）「プルーストの芸術家像における「内的祖国」の問題」

«La “patrie intérieure” ou la figure proustienne de l’artiste»

和田章男（大阪大学）「プルーストと『春の祭典』」«Proust et *Le Sacre du Printemps*»

セシル・ルブラン（パリ第3大学）「“オベールにふさわしい寛大さをもって”？  
『失われた時を求めて』におけるシュトラウス『サロメ』の受容研究」«“Avec  
une indulgence digne d’Auber” ? Étude de réception de la *Salomé* de Strauss  
dans la *Recherche*»

池田潤（白百合女子大学）「『サント＝ブーヴに反論する』のむこうのサント＝ブー  
ヴ」«Sainte-Beuve au-delà du *Contre Sainte-Beuve*»

中野知律（一橋大学）「プルーストとパランプセスト」«Proust et le palimpseste»

小黒昌文（駒沢大学）「科学大衆化時代のプルースト」«Proust à l’ère de la  
vulgarisation scientifique»

横山裕人（成蹊大学）「教育改革過渡期のリセ生徒プルースト」«Proust lycéen  
dans la période de transition didactique»

ナタリー・モーリヤック・ダイヤー（ITEM/CNRS）「年末のレビュー、プルース  
トにおける小ジャンルの創造性」«La revue de fin d’année, fécondité  
proustienne d’un petit genre»

吉川一義（京都大学・名誉教授）「『見出された時』におけるゴンクールの擬似未  
発表日記」«Le pseudo-inédit de Goncourt dans *Le Temps retrouvé*»